

## 5 月第 2 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 5 月 12 日（日）10：30～11：30 復活節第 7 主日
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネによる福音書 7 章 32 節～39 節（新約 p179）
- 説教題：「 生きた水の流れ 」
- 讃美歌：211 「 あさかぜしずかにふきて、」  
404 「 あまつましみず ながれきて、」

ある時、ヨハネによる福音書と他の三つ（マタイ、マルコ、ルカ）の共観福音書の違いは、主イエスがエルサレムに上られた回数である、ということを知ることがあります。気になってヨハネによる福音書を最初から読んだ記憶があります。確かに、2章という早い段階で過越祭近くに行かれて、その祭の間はエルサレムにおられたことが記されています。季節は春です。そして、本日の箇所（7章）の仮庵祭（かりいおさい）ですが季節は秋です。さらに、10章では22節、23節に「そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。23 イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。」と記されています。そのうえで、他の福音書と共通して描かれるのは、12章のエルサレム入場から十字架に至る出来事です。合計で4回ということになります。祭りとは、もちろん当時のユダヤ教の重要な祭りで、その意味が主イエスによって新しく捉え直されるということになるのです。他の3つの福音書は、主イエスがエルサレムに行かれるのは福音書の後半部分に描かれており、十字架への歩みが始まっている時期の1回のみで、過越祭との関連付けがなされています。もちろん、ヨハネによる福音書も最後のエルサレム行きですから、しっかりとその様子を描いています。

ところで、ヨハネによる福音書7章には、仮庵祭の時に主イエスがエルサレムに上り、神殿の境内で人々にお語りになったことが記されています。先ほど申し上げましたように、仮庵祭は秋の収穫の祭りで、一週間行われるこの祭りの間、ユダヤ人たちは仮庵つまり仮小屋を立ててそこで寝泊りをしたのです。その意味の一つには、イスラエルの民がエジプトの奴隷状態から主なる神によって解放され、約束の地へと荒れ野を旅していく間、天幕を持ち運びつつそこで生活をしながら移動していたことを覚える、ということがあります。それによって仮庵祭は単に収穫を感謝するだけでなく、主なる神によるエジプトからの救いの恵みを覚える祭りとして祝われていたのです。この祭りの時、エルサレムの町の外にあるシロアムの池から汲んで来た水を神殿の祭壇に注ぐという「水汲みの儀式」が行われました。これは、元々は翌年の春の収穫のための秋の雨を願ういわゆる「雨乞い」の儀式だったようです。そのような意味を踏まえながら、本日の聖書箇所を読んでまいりましょう。

本日の聖書箇所7章32節から39節は二つの段落に分かれています。前半はユダヤ人権力者たちと主イエスとの話し合いを描いていますが、話がかみ合わず、やがて主イエスの十字架へとつながる要因になっていくことが見え隠れしています。本日は、特に後半の37節から39節に注目したいと思います。37節は、「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」つまり一週間にわたって続けられてきた仮庵際の最終日の場面が描かれています。特に、旧約聖書の時代から続けられてきた「水汲みの儀式」が、主イエスによってどのような意味を持つものに変えられていくか、ということが主イエスご自身の言葉によって語られています。それは、旧約聖書のゼカリヤ書14章の預言の実現として語られているのです。ゼカリヤ書14章の1節に「見よ、主の日が来る」とあります。そして、この14章には繰り返し「その日」という言葉が出てきます。「その日」とは「主の日」です。「水汲みの儀式」との関係はゼカリヤ書14章8節から読み取ることができます。「その日、エルサレムから命の水が湧き出で／半分は東の海へ、半分は西の海へ向かい／夏も冬も流れ続ける。」と預言されています。主の日、すなわち世の終わりの救いの完成の日に、エルサレムで仮庵祭が祝われ、そのエルサレムから夏も冬も尽きることのない「命の水」が湧き出て、世界を潤していくのです。水汲みの儀式において神殿の祭壇に注がれる水は、この「命の水」を表しています。元々は雨乞いの儀式のためだった水が、世の終わりの主のご支配の完成においては世界の人々を潤す「命の水」になるという意味を持つようになったのです。7章37節から38節で、主イエスは「「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。38 わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」と大声で語られ、人々を招かれました。

そして注目すべきことに、仮庵祭における水汲みの儀式を意識しつつ主イエスがお語りになったこのことは、既に4章13節、14節においても記されていたのです。サマリアのヤコブの井戸の傍らでの一人の女性との会話においてです。そこで主イエスは、「この水を飲む者はだれでもまた渴く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」と語られました。この節で、「与える」という言葉が二回用いられています。この場面では、旅に疲れて井戸のそばに座っている主イエスが描かれています。現実には、その主イエスが咽喉の渴きを覚えて、サマリアの女に水を飲ませてほしいと願っていたはずですが、まず主イエスが「与えなさい 私に 飲むために」と女に呼びかけた言葉が、やがて、「主よ、与えてください 私に その水を」と女が主イエスに願っている言葉に変わっていきます。これらのことから見えてくるのは、ヨハネによる福音書は、本当に乾いているのは誰か、ということをお私たちに問いかけているということです。そして、私たちの魂の根源にある渴きが本当に癒されるのは一体どこなのか、とい

うことをも問いかけていると思います。主イエスは、私たち一人ひとりに、日常生活の中で呼びかけ、お招きくださっているのです。それは、主イエスが「わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」と語られる場への誘いでもあります。それこそが、主の日ごとにささげられるこの私たちの礼拝なのです。なぜ、そのようなことが言えるのかと言えば、それは、この4章の「イエスとサマリアの女」と題された話が、本日は読みませんでした。最終的には「霊と真理をもってするまことの礼拝」の到来という形で締めくくられるからです。そうしますと、まず、主が私たちの一人ひとりの日常生活の中の井戸のそばに座って私たちを待っておられ、そこで私たちに呼びかけ招かれるという出来事が起こっています。そして、私たちは誰でも主の呼びかけのみ声にお応えして礼拝に集ってくるのです。そして、この礼拝においてこそ決して渴くことのない「永遠の命に至る水」を与えられるのです。だからこそ、その与えてくださる御言葉という水を飲むものは誰でも変えられていくのです。

主イエスは既に4章で、そのように丁寧に「永遠の命に至る水」の話を書かれています。

本日の箇所7章37節で「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」と再びお語りになっています。そこには、シカルというサマリアの町の井戸のそばで一人のサマリアの女に語られた言葉が、本日の箇所では、仮庵祭という大勢の人々が集まっているエルサレム神殿の境内で群衆に向かって大声で語られるものとなっているという出来事の発展があります。主イエスからいただいた永遠の命に至る生きた水は、「その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」というように大きく発展しているのです。39節では、その水が一体何なのかということが、主イエスご自身によって説明されています。それは、これから起こる主イエスの十字架と復活の出来事を経て、起ることの約束として語られたのです。主イエスが与えて下さる生きた水によって渴きを癒され、周囲の人々をもその水によって潤していくことができるようになるのは聖霊を受けることによってです。主イエスが与えて下さる生きた水とは聖霊のことである、とすることもできるのです。私たちもそのようにして、飢え渴いていた時に、主イエスによって招かれ、生きた水を与えられ、やがては、その水が私たちの中から川のように流れ出るようになって、他の人々を潤していくことができる、その約束を信じていきたいと思います。